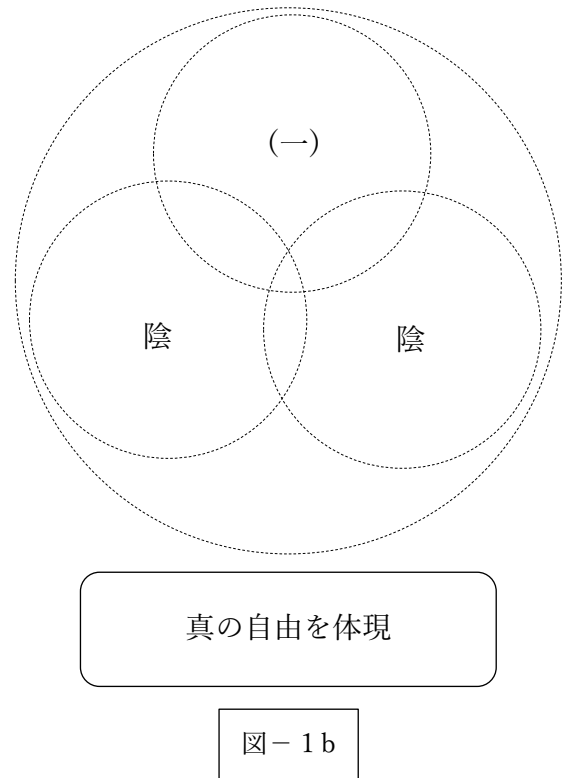
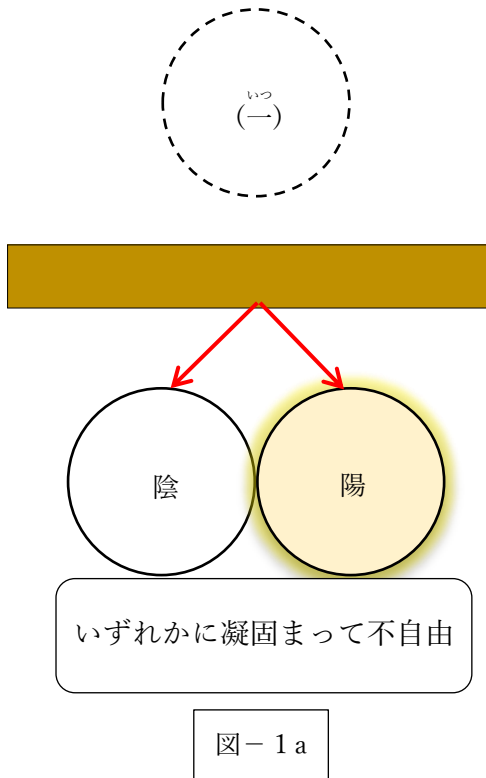


世間一般に言われる「信念」という言葉のこと、“俺の信念は固い、動かぬ信念、ぶれない信念、揺るぎない信念”と言われる。そのものの意図する心情は、図-1で例えれば、二項対立世界のどちらか一方の極に凝り固まっている証拠なのである。そこに凝固まって不自由を来たしている、自作のバリア・ベールで自らを包んでラミネートし、剥がれないようにしているも同然なのだ、しかし、本人はそのことに気付かないのだ。思想信条がどちらかの、何かの極に偏って固執している、硬直・停滞している事象なのだ。「不二の法門」が閉ざされることから、<sup>いつ</sup>「一」の世界、すなわち、いきがい感や充実感が蓄蔵されている真の自己、理想精神の欲求や良心・致良知の心に辿り着くことは出来ないのだ。



「華嚴世界」が教える「もの・こと」の森羅万象は、総ての個体の縁起による集合体、すなわち、**相互**  
**関連性・相**<sup>そうえ</sup>**依**相関ネットワーク（縁起）の賜物だという、このことから、今この瞬間は留まることを知らずして、**自分を取り巻く環境は時々刻々変化・変容しているのである。** 自分を取り巻く環境・条件・シチュエーションが時々刻々変化している中のある一点で、“俺の信念は〇〇だ”と世に周囲に、宣言・宣誓した処で、旧態依然と“俺の信念は〇〇だ”とんだ処で、何の意味を為すのか、真の共感は生まれるのか、周辺事情が変われば変わったで、そこに適切な信念と称する決意、行動意欲が表明されなければ、共感も共生の協調も生まれる訳が無いのだ。いくらテーマ・命題は同じであろうが、相手が変われば、場所が変われば、その課題解決のための考え方や方策は自ずと変わるだろう。

そういうことを踏まえた上で、私は信念という言葉ではなく「正念」という言葉を使う。したがって、私のいう正念とは、「TPOに即応の最適解」を見出す心・言・行、つまり、時処位柔軟即応最適解を求める実践的な「心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」を言うものだ意識している。

ここで浮かぶのが伊勢神宮の最重要深秘「<sup>じんぴ しん みはしら</sup>心の御柱」——出雲大社他や出羽三山羽黒にも見られるという——のことである。詳細は割愛しイメージは図-2のとおりであるが、詳細は秘密にされている。私が着目するは、神宮正殿中央の床下に設置する柱と建屋との関係である。社殿はご神体の八咫鏡（御船代）とその「心御柱」が上下びったり一致するように建立される。しかし、<sup>みはしら</sup>御柱と言いながら、**本殿とは構造的に繋がっている訳ではなく、いわば独立した存在で床下にある**とされる。ご神体を<sup>かくま</sup>置く建屋と、そのよって立つ根拠を為す最重要深秘「<sup>じんぴ しん みはしら</sup>心の御柱」は必要性においては密接不可分の状態にある。

つまり、風雨説で建屋は揺れたとしても、「<sup>しん みはしら</sup>心の御柱」は一切揺れない、建屋の影響を受けない。しかし、地震で大地が揺れた時は、同時一緒に動くという訳である。これを人に重ねれば、アイデンティティは建屋、正念は<sup>しん みはしら</sup>心の御柱である。アイデンティティ、すなわち、建屋——心・言・行は環境に従い柔軟・機敏に動くが、<sup>しん みはしら</sup>心の御柱、すなわち、正念は安直には動じない、が、必要（時）に応じて反応する。しかし、<sup>しん みはしら</sup>心の御柱はどこまでも一目には付かない、つまり、“俺の信念は固い、動かぬ信念、ぶれない信念、揺るぎない信念”などと決して公言しないのだ。。

正念という言葉は仏教の「八正道」の中の一つの徳目とされ、邪念・邪心を払い、真理を求めるべく仏道を心に思い留めることを意味するという。簡単に邪念・邪心を払うことは叶わずとも、仏道を求める心は——<sup>しきふいくう くうふいしき</sup>色不異空 空不異色<sup>しきそくぜくう くうそくぜしき</sup>色即是空 空即是色（＝拘るな、偏るや、固持・硬直するな・・・）——を強く念ずれば修養出来るはずと思っている。

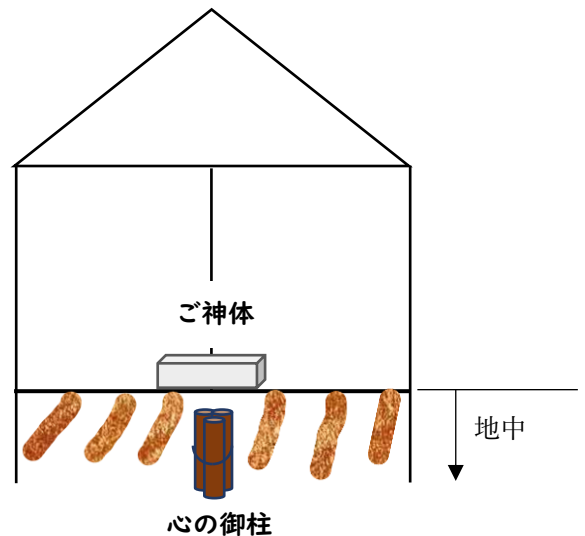


図-2

私は、一般的に言われる信念は、私においては、正念であり、伊勢神宮の「<sup>しん みはしら</sup>心の御柱」的存在で有りたいものだ。

(end)